

7 温暖な気候を生かした園芸産地の育成(野菜・果樹・GAP)

【成果の要約】

- 1 与論版さといも疫病対策 I P M防除体系の認知度は前年より向上した。
- 2 新品種「キセラネオ」の品種特性、栽培ポイントを把握することができた。
- 3 アンケート調査を行い、ニンニク栽培における課題（ネダニ、葉枯病の防除）の実態が把握できた。
- 4 消費拡大が期待される茶豆風味のえだまめの実証を行い、品種特性、収量を把握し生産者に情報提供を行った。
- 5 マンゴー安定生産技術の理解が深まり、栽培技術向上への意識高揚が図られた。

1 対 象

与論町野菜振興会さといも部会 104 戸，与論町野菜振興会いんげん部会 105 戸
和泊町園芸振興会にんにく部会 67 戸，知名町えだまめ生産組合 30 戸
沖永良部果樹生産組合 92 戸，与論町果樹振興会 257 戸
ヨロン希少フルーツ組合 5 戸
和泊町園芸振興会 339 戸，知名町園芸振興会 304 戸，与論町園芸振興会 171 戸

2 課題を取り上げた理由

- (1) さといもは、病害（疫病等）の発生により生産性が低下し、また、高齢化や労働力不足により、栽培が困難となっている。
- (2) さやいんげんは、天候不良等により品質や単収に年次間差があり、生産量が安定していない。また、土壤環境悪化等の連作障害により生産性が低下している。
- (3) にんにくやえだまめ等の新規振興品目の産地振興が必要である。
- (4) マンゴーは年次間の収量格差が課題で、品質向上と着果の安定対策が必要である。
- (5) 引き続き G A P への取組の推進により安心安全な農産物生産を図る必要がある。

3 活動内容と成果

(1) 野菜生産振興

ア さといも

疫病対策として、与論版さといも疫病対策 I P M防除体系（残渣の簡易処理、種芋一斉防除、ドローン委託防除等）を推進し、体系の認知度は 75%（前年度+13%）に増加した。栽培研修会では、疫病に関する現状・対策アンケート結果も踏まえて適期疫病防除を指導した。

省力化体系として、施肥・畝立て・畝内陽熱プラス消毒一貫体系の実証と受託作業の方法について検討した。



さといも栽培研修会

イ さやいんげん

新品種「キセラネオ」の栽培実証結果より露地・施設栽培に適した栽植密度を把握することができた。栽培研修会では、過去の実証結果も踏まえ、品種毎の特性に応じた栽培を指導した。

土壌の適正管理に向けて、土づくり研修会や施設栽培農家への関係機関連携した施肥設計コンサルティングを行うことで、農家の土づくりの意識は高まり、単肥での肥料成分の調整や土壌改良資材の活用が進んだ。

ウ ニンニク

出荷反省会でのアンケート調査やほ場巡回を行ない現状把握・課題の整理を行なった。また、講習会では出荷反省会のアンケート調査の結果から発生が多かった葉枯病やネダニの防除を行なうよう呼びかけた。ネダニの発生は、昨年よりは減少したが、一部発生が見られた。



ニンニク栽培講習

エ えだまめ

講習会、現地検討会、反省会を行ない、栽培管理や病虫害防除の周知徹底を呼びかけることで単収向上や害虫の低減が図られた。また、茶豆風味品種の実証及び結果の周知を行ない今年度の秋作から栽培を始めた生産者も見られた。徳之島のえだまめ生産者との意見交換も行い、栽培技術の向上を図った。

(2) 果樹生産支援

各町及び農業開発総合センターと連携のもと、マンゴー、タンカンの栽培技術研修会や個別巡回による技術支援を行った。マンゴーについては、着果安定のための栽培管理技術(剪定 水・温度管理)を中心とした指導により、連年結果するほ場が増加している。



マンゴー栽培技術研修会

(3) 安心・安全な農産物の生産

講習会で病虫害管理や収穫・調整管理等の取り組みについて説明した。新規就農者基礎講座で、新規就農者12名にGAPに取り組む必要性について説明し、概ね理解を得られた。施設栽培にがうり4戸いんげん8戸の施肥設計を町・JAと分担しながら実施し、土壌分析結果に応じた施肥の必要性について農家の理解が深まった。



いんげん施肥設計コンサルティング

4 今後の課題

(1) 野菜生産振興

- ア さといも：病害(疫病・乾腐病)被害軽減による生産性向上
- イ いんげん：品種特性を生かした栽培方法の普及
- ウ ニンニク：病虫害(ネダニ、葉枯病)の防除による生産性向上
- エ えだまめ：研修会等による基礎的な栽培技術の普及

(2) 適正着果，着果率向上，適正防除による安定生産(品質，収量，年次間の結果安定)

(3) GAPの取組の継続した推進による安心・安全な農産物の生産。

5 担当した普及職員(○印はチーフ)

○水迫陽子，折田高晃，満吉俊也，下池優希

8 温暖な気候を生かした園芸産地の育成 (花き:スプレーギク, ソリダゴ)

【成果の要約】

- 1 県育成夏秋スプレーギク品種のインドネシア産穂木での試験栽培を行い、栽培可能品種を絞り込んだ。
- 2 夏秋スプレーギクおよびソリダゴのスマートフラワー出荷において新たな鮮度保持シートを用いることでコストダウンを図った。
- 3 スプレーギクおよびソリダゴ生産者が導入する門型無人防除機の散布実態調査を通じ、防除効果の有効性を確認した。

1 対象

スプレーギク経営発展志向生産者 39 戸
ソリダゴ経営発展志向生産者 47 戸

2 課題を取り上げた理由

- (1) 県育成キク品種の種苗が鹿児島県フラワーセンターからインドネシア種苗会社の供給へ移行したことで、低温遭遇量の低下による開花特性の変化が心配される。
- (2) 令和4年7月から全量スマートフラワー規格での出荷となったが、出荷に使用する鮮度保持シートのコストが約70円かかりコストダウンが必要。
- (3) 労力負担の大きい農薬散布作業の省力化が必要。

3 活動内容と成果

- (1) スマートフラワー規格等の安定生産・出荷技術の確立

ア インドネシア産挿し穂の検討 (スプレーギク)

2農家の協力を得て、県育成7品種(品種名:サザングレイス, サザンサマーホワイト, サザンペガサス, サザンチェルシーイエロー, サザンチェルシー, サザンサマーピンク, サザンプラム 以下, 呼称サザン省略)のインドネシア産穂木を利用した5, 6, 8月出荷夏秋スプレーギク栽培実証を実施し, 生育特性を把握した。

供試した7品種のうち, 正常に開花しなかったのはペガサスで, 高所ロゼットとなり収穫皆無となった。その他の6品種は問題なく開花したため, 沖永良部地域ではペガサス以外の品種が安定生産可能であることが示された。

イ 鮮度保持シートの検討 (スプレーギク, ソリダゴ)

梅雨時期の6月および猛暑期の8月下旬に3種類の鮮度保持シートを用いた輸送実証を行い, 既存のシートと同等の性能を持つ資材の検討を行った。

6月は大田花き, 8月は秋田生花, 大田花きに出荷し, 船舶と航空便の2パターンで輸送した切り花の着荷状態, その後の花持ちについて産地, 市場関係者, 資材メーカー担当による調査を行った。

その結果, 既存のシートと遜色のない鮮度保持効果を持ち, 価格も安い資材が選定され, 令和6年11月より順次切り替えられることとなった。



写真1 市場での検討の様子

ウ 他産地の情報収集（スプレーギク，ソリダゴ）

6月にキクのスマートフラワー産地である長野県，8月に大規模機械化産地である秋田県の視察調査を行った。

特に秋田県については視察調査がきっかけとなり，11月に秋田から視察団が訪れるなど，積極的な情報収集，交流が図られた。



写真2 他産地との情報交換

（2）生産性の向上

ア 門型無人防除機の検討（スプレーギク，ソリダゴ）

手散布と防除機の散布実態調査を行い，10aあたりの農薬使用量，作業時間，作物体への農薬付着度を調査した。

防除機は手散布と比較して農薬使用量が約半分，作業時間が約3割で済み，大幅にコストダウンが図られることが判明した。一方，付着量調査では手散布に比べると農薬が届きにくい畝内側の葉裏面の付着量がやや劣る結果となった。

よって葉裏に生息し，被害を及ぼすクロゲハナアザミウマ，ハダニ等の防除の際には浸達性もしくは浸透移行性の高い農薬を選択する必要性が示唆された。

表1 農薬散布量，作業時間の比較

方法	農薬使用量 (ℓ/10a)	割合	作業時間 (分)	割合
手散布	357	100%	95	100%
防除機	198	55%	27	29%

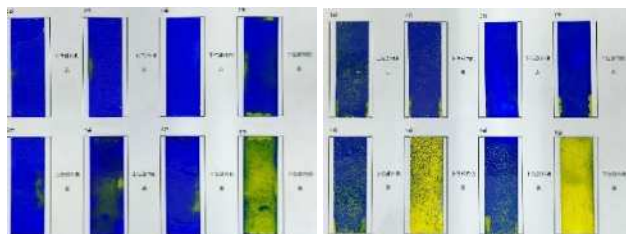


写真3 農薬の付着状況（左：手散布，右：防除機）

イ 優良品種・系統の実証・普及（スプレーギク）

和泊町実験農場のは場で民間種苗会社育成品種の3月出しでの品種把握を行った。開花時期に生産者及び関係者で現地の評価を行い，民間品種 品種を有望品種として選定した。

ウ 病害対策確立に向けた実態把握（スプレーギク）

今年度は夏季の高温によるフザリウム菌による立枯病が多発し，計画通りに出荷できない事態が発生した。対策確立の第一歩として今年度発病しにくかった品種について生産者にアンケート調査ととりまとめを行い，情報共有した。

4 今後の課題

- （1）夏秋スプレーギク品種のインドネシア産穂木の特性把握
- （2）省力化技術の確立・普及（無線式防除機）
- （3）現地に適応した品種の検討・普及
- （4）若手生産者を中心とした中核農業者の育成

5 担当した普及職員（○印はチーフ）

○肥後修一，市来佑悟

8 温暖な気候を生かした園芸産地の育成(花き:グラジオラス)

【成果の要約】

- 1 新規栽培者への巡回指導を行い、栽培技術の定着を図るとともに土壌病害対策など技術向上への課題整理を行った。
- 2 J Aあまみ知名花き部会員を対象に栽培研修会、出荷目揃会等で情報提供を行い、病害発生抑止への啓発を行った。年内出荷の作型は高温の影響による病害の発生や切り花長の不足等による出荷数量、上位等級の減少が見られたが、販売価格については堅調に推移した。

1 対象

グラジオラス生産者 81 戸

2 課題を取り上げた理由

- (1) グラジオラスは競合する地域がなく、販売も好調であるため、収益性が高い品目である。しかし、連作障害の発生や生産者の高齢化により販売額は減少傾向である。
- (2) 昨年度の新規栽培者 9 名や今年度新規就農者 2 名に対する継続的な技術習得支援が必要である。

3 活動内容と成果

- (1) 生産性の向上

ア 新規栽培者の育成

今年度新規就農者 2 名に対し、就農基礎講座での経営管理手法、病虫害対策、土壌管理技術等について基礎知識の習得支援を行った。

また、関係機関花き担当と連携し、昨年度の新規栽培者 9 名を含めたほ場巡回を 11 月中旬に実施するなど、基礎技術の習得支援を行うとともに、各生産者の課題の把握と今後の支援方針について認識を共有した。

イ J Aあまみ知名花き部会員への情報提供

定植時期が高温であることを受け、10 月下旬の部会定例会、12 月上旬の出荷目揃会にて栽培初期の病害対策の情報提供を行った。

しかしながら、今年度は 9～11 月にかけての多雨、10～11 月の高温により、乾腐病及び首腐病の多発や草丈不足に見舞われ、年内出荷については出荷量の減少を招いた。

4 今後の課題

- (1) 定期的な栽培講習会等の開催による新規栽培者の栽培技術定着と生産量向上による経営安定支援。
- (2) 安定生産のための関係機関と連携した品種選定、作型の検討、実践。

5 担当した普及職員（○印はチーフ）

○肥後修一，市来佑悟

8 温暖な気候を生かした園芸産地の育成(花き:トルコギキョウ)

【成果の要約】

- 1 自家育苗及び切花栽培に適した品種を2品種選定することができた。
- 2 沖縄県のトルコギキョウ視察をし、品種、仕立て方、土壌病害対策、物流の2024年問題後の輸送の取組について学ぶことができた。

1 対象

トルコギキョウ生産者 和泊町10戸、知名町2戸、与論町6戸

2 課題を取り上げた理由

- (1) トルコギキョウは、与論島や沖永良部島の切花販売額第4位で収益性や消費者ニーズが高い品目である。
- (2) 近年、種苗コストが軽減でき、計画的に定植できる自家育苗を導入する生産者が増加しているが、自家育苗及び切花生産可能な品種選定が急務である。

3 活動内容と成果

- (1) 生産性の向上

ア 自家育苗及び切花栽培に適した品種の選定

園振協本部（農業開発総合センター、経済連）及び管内関係機関と連携して与論島にて実証ほを設置した。計6品種で7月上旬播種、9月下旬定植、1月下旬出しの慣行（種子冷蔵＋夜間冷房）と種子冷蔵のみで育苗した切り花の生育調査を行い、2品種有望品種を選定した。

イ 沖縄県のトルコギキョウ視察研修

1月に沖縄県にてトルコギキョウ視察研修を行い、沖永良部島、与論島の生産者と関係機関が参加した。暖地に適した品種やコサージュ仕立て、土壌病害対策、物流の2024年問題後の輸送の取組等について学んだ。

4 今後の課題

- (1) 自家育苗及び切花生産に適した品種の選定
- (2) 立枯病による土壌病害対策

5 担当した普及職員

○市来佑悟、肥後修一、満吉俊也



実証ほの調査（与論島）